

開学20周年に寄せて



奈良先端科学技術大学院大学第2代学長・名誉教授
山田 康之

奈良先端科学技術大学院大学創立20周年、誠におめでたく満腔の祝意を表し、お祝い申し上げます。日頃、報道関係で奈良先端科学技術大学院大学の皆様の研究成果が報告されますと、我が事のように嬉しく、また皆様が非常にご活躍されている事に心からなる敬意を表しております。

私が第2代学長として勤務いたしましたのは、平成9年4月から平成13年3月まででございます。当時と現在の大学の外観・建物はあまり変わっていないように存じます。

しかし、大学の組織ならびに運営などに関しましては、国立大学法人化の下で大きく変化したと思います。私が学長当時は月一回の評議会と各研究科の教授会が開催され、これが大学の運営方針の大綱を決める場でありました。評議会などではいろいろな議論が出まして、私が結論を導き出す事が難しいような場合もございました。只、私の信念として二つの相異なる見解がありました場合、その両者の中間的な合意の結論を出すことを避け、提案されたどちらかのご意見に皆が賛同されるまで討議する事が重要であると考えておりました。これは、この小さな大学院大学の先生方がお互いに納得し合う事が大切だと考えていたわけでありました。

現在、多くの大学の教授の先生方は、皆様あまりにも会議が多く、お忙しくしておられる様子を伺っております。ただ、私が懸念致します事は、多くの会議が形骸化しており、ほとんど議論もなく、報告事項を出席者が聞いているだけではないかと恐れています。現在の世の中は、情報ネットワーク化が進み、各人のパソコンから都合の良い時に執行部の決定した報告を得る事が出来ます。こういったしますと何も特定時間に集まる必要もなく、かつ正確に文書で報告事項を得ることが出来ます。また、その報告に対して意見のある教員は自分の意見を伝えることが可能であります。

私が学長をいたしておりました時は、組織として複数の副学長も理事もどなたもおられませんでした。私が相談できるのは一人の副学長と事務局の局長ならびに二人の部長だけでした。それでも、私は限られた人数の執行部の皆様のご援助で4年間勤め上げることが出来ました。無論、3研究科長にはそれぞれの研究科のご意見を伺ってご支援をいただきました。この体制当時、本学大学院への入学生は日本全国にわたる旧帝大系の国立大学を主体とした学生が過半数以上であったと記憶しております。

大学院の教育と研究は、立派な指導者としての教授ならびに教員とその指導者を慕って集まる学生にあると思います。現在の先生方は私が退職した後、赴任された方も多く存じ上げない方も多と思います。奈良先端科学技術大学院大学から立派な研究成果が報道されますことは、おそらく責任感と使命感の強い立派な先生方と非常に優秀な学生が現在も集まっているのであろうと推測いたしております。私は、入学試験で試験官が学生の入学後の指導について全責任を負うという発言があれば、その学生を入学許可しても良いという考えを申したことがありました。先生が良き指導を行い、学生が学問に精進するには、先生が学生と直接接触する時間が多いことが必須であります。このために先生方が貴重な時間を出来る限り教育研究のために費やされる事が肝要であると考え次第であります。

以上、退官し、教育・研究の場から長く離れた教師の言葉であります。奈良先端科学技術大学院大学の益々のご発展、ご活躍を祈り、心からなる祝辞とさせていただきます。